

伴奏付けの指導方法に関する一考察

～カワイピアノグレードテスト6級「伴奏づけ」より～

A Study of the Accompaniment Teaching Method
～From the KAWAI Piano Grade Test Grade 6「the Accompaniment」～

木村 貴子

Takako KIMURA

青森中央短期大学幼児保育学科

Department of Infant Education, Aomori Chuo Junior College

Key words : コードの習得、伴奏づけ、カワイピアノグレードテスト

はじめに

本学幼児保育学科では、平成20年度より専門科目「音楽表現法Ⅰa」「音楽表現法Ⅰb」において、コードによるピアノ伴奏の指導を行っている。入学時、学生の大半はピアノ演奏経験があまりない初心者である。ピアノという楽器そのものに慣れていく過程の1つとして身に付けるコード奏は、左手において決まった指使いと手の形があるため、初心者が両手での演奏に入り易いという点がある。一方、入学前からピアノ演奏の経験がある一部の学生においても、楽譜通りに演奏するという経験はあってもコードの知識及び伴奏付けの経験がある学生は少ないことから、全員共通にコード奏を学ぶ他、こども歌に応用できるコードの作り方や転回形といった楽典に関する知識についても授業内で紹介している。

また、本学科では平成26年度からピアノの習熟度向上を目的としてカワイピアノグレードテストを導入している。テスト内容は、7級まではピアノ演奏の課題のみだが、指導者を目指すための6級以上のテストでは、コードによる伴奏付け課題も平行して設けており、ピアノ演奏の技能だけでなく、即興的に伴奏する力も受験者は試される。伴奏付けの基礎となる部分は授業内で全員に対して指導しているが、6級以上のグレードを目指す学生へは授業外に個人レッスンを設けており、より専門的な指導を行っている。

本研究は、私自身がこれまで6級以上のグレードテスト受験希望者に対して行ってきたピアノ伴奏の指導方法についてまとめたものであり、カワイグレード認定委員会が発行している「カワイピアノグレードテスト～6級「伴奏づけ」受験のために～」を伴奏付けのテキストとして用いる際、本研究において提示する具体的な練習方法を指導に取り入れると有効的であると考えられる。

1. カワイピアノグレードテスト6級の伴奏付け課題について

カワイグレードテスト6級の伴奏付け課題には、「メロディー & ベース」と、「コード & ベース」の2種類があり、受験者はそのどちらも試される。本研究では、コードによるピアノ伴奏に焦点を当て、「コード & ベース」の指導法を述べていく。

「コード & ベース」の課題は、以下の通りである。

コード範囲：major, minor, minor ⁻⁵ , dominant7
小節数：8～12小節程度
調範囲：# 1つ・b 1つまでの長調・短調
予見時間：30秒（音出し不可）
当日提示されるコードネーム、冒頭のパターンに基づき、コードとベースを演奏すること。

まず、調の範囲が指定されているので、何調が対象となるのか確認する。# 1つ・b 1つまでの長調・短調をまとめると、以下6つの調が対象となる。

表1. カワイグレードテスト6級「コード&ベース」における調範囲

	#・b なし	# 1つ	b 1つ
長調	ハ	ト	ヘ
短調	イ	ホ	ニ

次に、各調の具体的なコード範囲について確認する。まずは3つの長調において、それぞれの音階から作られるmajor, minor, dominant7のコードをまとめると、以下の通りとなる。

表2. カワイグレードテスト6級「コード&ベース」の長調におけるコード範囲

長調	ハ	ト	ヘ
major	C, F, G	G, C, D	F, B ^b , C
minor*	Dm, Em, Am	Am, Bm, Em	Gm, Am, Dm
dominant7	G7	D7	C7

*minor⁻⁵は3つ作られるが、テキスト内に「6級の長調ではminor⁻⁵は使われない」と表記があるので除いている。

major と minor コードにおいては、調が変わっても同じコードが含まれている。これらを整理すると、major コードはC, D, F, G, B^bの5つ、minor コードはDm, Em, Gm, Am, Bmの5つのコードが範囲となる。これら全てのコードを習得するには、まずmajor コードの基本形の習得から始める。学習者はコードネームを見ただけで瞬時に左手でベース音、右手でコードを押さえることができるようになるまで練習する必要がある。個人差もあるが、右手でコードを弾く際に、ベース音をどの指で弾いているのかを意識させると指の形が安定し、おおよそ1～2ヶ月程度で瞬時に掴めるようになってくる。

例) C 基本形：親指がベース音、第1転回形：小指がベース音、第2転回形：中指がベース音

この練習を行うにあたり、Cycle of Fifths（5度のサイクル）を使う。(図1) 時計とは逆回りに(Cから始めたとすれば、C→F→B^b→E^b・・・の順に)弾いていく。練習のバリエーショ

ンとして、以下の3つを挙げる。

- 1) Cycle of Fifths C → F → B^b → E^b → A^b → D^b → G^b → B → E → A → D → G → C
- 2) 半音階上がり C → D^b → D → E^b → E → F → G^b → G → A^b → A → B^b → B → C
- 3) 半音階下がり C → B → B^b → A → A^b → G → G^b → F → E → E^b → D → D^b → C

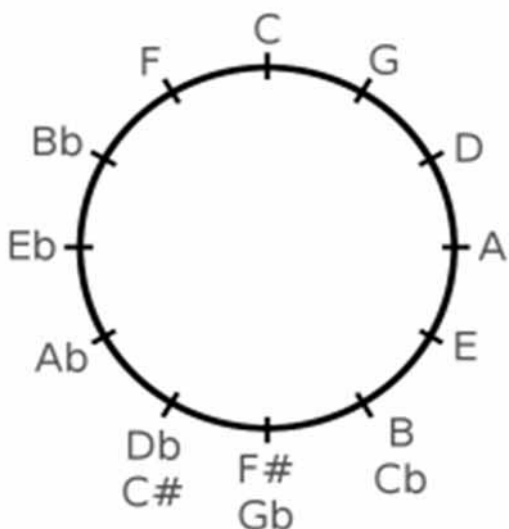


図1 Cycle of Fifths

いずれのバリエーションで練習する場合でも、メトロノームを使用して一定のリズムを刻みながら演奏する。テキスト内の例題には冒頭のパターンが示されている。このパターンに基づき、左手でベース音を、右手でコードを演奏する。(図2-1~2-3) majorコードの基本形が瞬時に掴めるようになったら、同じ練習方法で第1転回形(図3-1~3-3)、第2転回形(図4-1~4-3)も練習する。これらを習得した後、Cycle of Fifthsで基本形と転回形を混ぜて弾く。(図5) 混ぜて弾く事で、コードからコードへ移る際に、共通している音を保持できるようになる。慣れるまでは、なるべく近いポジションで弾くように意識するとよい。majorコードが瞬時に掴めるようになったら、minorコードの練習へ移行する。majorコードをまず弾いてから3度の音を半音下げるといった手順で練習を始めると入り易い。(図6) 同じように、majorコードを基本に、7度を半音下げた音を加えて dominant7を作る。表2で示したように、dominant7のコード範囲は G7, D7, C7の3つとなっているので、これらを集中的に練習するのもよい。以上のコードが身に付いたらテキストの例題をこなしていく。コード進行にはパターンがあるので、例題をこなしていく内にコードとコードの連結がスムーズにできるようになる。テキストからコード進行のパターンを挙げると次のようなものがある。

- 1) I → VI m → IV → II m - V → VI m → IV → II m - V → I
- 2) I → V7 → I - II m → V7 → VI m → IV → II m → V7 → I

上記のコード進行のパターンを、表1に示している3つの長調のいずれでも弾けるように繰り返し練習する。

次に短調の伴奏付けについて述べていく。短調のコード範囲とコード進行のパターンは次の通りである。

表3. カワイグレードテスト6級「コード&ベース」の短調におけるコード範囲

短調	イ	ホ	ニ
major	E, F	B, C	A, B ^b
minor	Am, Dm	Em, Am	Dm, Gm
minor-5*	Bm-5	F # m-5	Em-5
dominant7	E7	B7	A7

*minor⁻⁵は他3つ作られるが、テキスト内に「Ⅶの和音は使用しない」と表記があるので除いている。

表3に含まれる major と minor コードは、図2～図6の練習方法の中に含まれているので説明は省略する。ここで新たに練習が必要となるのは、 Bm^{-5} , $F \# m^{-5}$, Em^{-5} の3つの $minor^{-5}$ である。 $minor^{-5}$ は、minor コードの5度を半音下げて作る。練習方法は次の通りである。(図7)

以上のコードが身に付いたらテキストの例題をこなしていく。長調と同じく、コード進行にはパターンがあるので、例題をこなしていく内にコードとコードの連結がスムーズにできるようになる。テキストからコード進行のパターンを挙げると次のようなものがある。

- 1) $I m \rightarrow VI \rightarrow IV m \rightarrow II m^{-5} - V \rightarrow VI \rightarrow IV m \rightarrow II m^{-5} - V \rightarrow I m$
- 2) $I m \rightarrow V7 \rightarrow I m - II m^{-5} \rightarrow V7 \rightarrow VI \rightarrow IV m \rightarrow II m^{-5} - V \rightarrow I m$

上記のコード進行のパターンを、表1に示している3つの短調のいずれでも弾けるようにするとよい。

その他、「分数で書かれるコード」という呼び方で“スラッシュ・コード”が紹介されているが、これは左に書かれているコードを右手で、右に書かれているコードは左手のベース音として弾くと説明すれば理解が早い。しかし、その見た目から左右逆で弾きそうになるので、頭では理解していても慣れるまで練習が必要だろう。

例) C / G 「ソ」を左手で、「ドミソ」を右手で弾く

最後に、テキストからランダムに出題し、予見時間30秒を計り演奏するということを繰り返すことで、瞬時に伴奏付けができるか確認する。これまで指導してきた経験から述べると、 $dominant7$ に苦手意識をもつ学生が多いようだ。7度の音が加わる事で、音が1つ多いという意識があることと、そのために第3転回形まで和音を作ることができるからだ。この場合、学生へはまず第3転回形から覚えることを勧めている。第3転回形は「major コードのベース音の下に、1つ下の音(7th)をつける」という考え方をすれば鍵盤上で押さえ易い。

例) $C7$ 「ドミソ」にベース音「ド」の1つ下の音「シb(7th)」をつけ、「シbドミソ」

具体的な練習方法は次の通りである。(図8)

学生の中には、コード範囲の全てのコードを、以上紹介した練習方法によって2ヶ月ほど猛練習をし、弾きこなしてくる者もいる。もちろんそうなるには、入学当初からピアノ経験があるというのが必須だと思うが、本人の努力と体が覚えるまでの時間があれば、コードによる伴奏付けは初心者でも習得可能である。

2. まとめ

保育者が現場でピアノ演奏をする場面を挙げると、朝帰り・昼食時に歌う生活の歌の伴奏、季節の歌の伴奏、お遊戯会やお誕生日会・入園卒園等といった行事での演奏、その他保育活動の中で身体表現活動と組み合わせる、BGMとして流すなど様々な場面が考えられる。これらに使われる曲をピアノ初心者が楽譜通りに全て弾きこなすには、かなりの練習時間と努力が必要となる。また、伴奏者に求められるのは「弾き直さない事」である。こういった現場の状況の中、初心者にとって授業で学んだコードによるピアノ伴奏は有用であろう。また、楽譜通りにピアノを弾くことが得意な場合でも、グレードテストで伴奏づけが演奏と平行して設けられているように、コードのアレンジ奏法までしっかりと習得していれば、初めて演奏する曲でも短時間で仕上げる事ができ、尚且つ即興的なアレンジ

によって単調な左手の伴奏もより音楽的に演奏することが可能となる。アレンジのバリエーションが多ければ多いほど、子ども達の様子や活動内容に合わせて、一つの曲を何通りにも雰囲気を変化させて演奏することが出来るだろう。音楽で子ども達とコミュニケーションを取る事が出来た時、保育者はピアノ伴奏に楽しさとやりがいを見いだすにちがいない。

これまでの指導を振り返るにあたり、学生にはアレンジ奏法まで習得して欲しいという願いがある。しかし、自分自身でアレンジして弾くというのは、ピアノ演奏の技術がある程度身に付いてから出来る事であるため、これらを授業内で紹介するタイミングや、どのような方法だと学生にとって分かり易く、且つ現場ですぐに活かせるものとなるのか、その指導方法については今後も引き続き検討していきたい。

C F B^b E^b A^b D^b →→

図 2-1. 基本形 Cycle of Fifths

C D^b D E^b E F →→

図 2-2. 基本形 半音階上がり

C B B^b A A^b G →→

図 2-3. 基本形 半音階下がり

C F B^b E^b A^b D^b →→

図 3-1. 第 1 転回形 Cycle of Fifths

C D^b D E^b E F →→

図 3-2. 第 1 転回形 半音階上がり

C B B^b A A^b G →→

図 3-3. 第 1 転回形 半音階下がり

C F B^b E^b A^b D^b →→

図 4-1. 第 2 転回形 Cycle of Fifths

C D^b D E^b E F →→

図 4-2. 第 2 転回形 半音階上がり

C B B^b A A^b G →→

図 4-3. 第 2 転回形 半音階下がり

C F B^b E^b A^b D^b →→

基本形 第 2 転回形 第 1 転回形 基本形 第 1 転回形 基本形

図 5. 基本形と転回形を混ぜて弾く Cycle of Fifths

C Cm F Fm B^b B^b m E^b E^b m A^b A^b m D^b D^b m →

図 6. 基本形 minor コードの練習方法 Cycle of Fifths*

* この他、第1転回形・第2転回形から始める方法や、半音階上がり・下がりする方法もある。慣れてきたら、2拍目から minor コードで弾き、より早く正確に掴めるように練習する。

Bm Bm⁻⁵ F#m F#m⁻⁵ Em Em⁻⁵

図 7. 基本形 minor⁻⁵ の練習方法

C C7 F F7 B^b B^b7 E^b E^b7 A^b A^b7 D^b D^b7→

図 8. 第 3 転回形 dominant7 の練習方法 Cycle of Fifths

参考文献

- ・カワイグレード認定委員会：カワイピアノグレードテスト～6級「伴奏づけ」受験のために～ 2016
- ・カワイグレード認定委員会：2016カワイグレードテストのご案内～指導者を目指すためのグレード（6～2級）～ 2016
- ・Mark Levine：The Jazz Piano Book, SHER MUSIC CO. 1989
- ・Dan Haerle：THE JAZZ LANGUAGE A Theory Text for Jazz Composition and Improvisation, Studio-Pr 1982